

「融」を歩く

今回は「R」京都駅から徒歩で十分ほどの真宗本廟（東本願寺）別院「涉成園」（京都市下京区）、五条木屋町・河原院跡（京都市下京区）、嵯峨釈迦堂五山清涼寺（京都市右京区）の三箇所を訪れ、清涼寺では執事の大田氏、東本願寺では総務部の近松氏にお話を伺う事ができました。能「融」の主人公（シテ）源融は、第五十二代嵯峨天皇の第十二皇子であり、第五十代桓武天皇の孫にあたる実在の人物です。百人一首「みちのくのしのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにしわれならなくに」の歌で知られる歌人であるとともに、源氏の姓を賜って臣籍に下ってからも帝位への望みが捨てがたく、政治的には不遇の晩年を送った話も有名です。紀貫之が、源融の別邸であった六条河原院で詠んだ「君まさで 煙絶えにし塩竈の うらさびしくも 見えわたるかな（『古今集』）」や、在原業平を主人公とした「伊勢物語」にも、陸奥国塩竈の景色を移した邸宅が記されているほか、『今昔物語』『江談抄』では源融が亡くなった後、宇多院の所有するところとなった河原院に相変わらず融が亡霊となって居つき、宇多院に一喝される話が出てきます。本曲でも、シテの融は若く風雅な貴公子の姿で河原院に現れ、かつての豪奢な遊びを再現します。贅をつくした河原院は『源氏物語』の主人公・光源氏が住まう六条院のモデルであったとい

い、源融自身も光源氏のモデルと云われているようです。源融の別邸であった河原院は、「R」京都駅から北東、北は現在の五条通り、南は六条通りあたり鴨川の西岸の辺りに位置する広大な地域です。現在は五条木屋町下川高瀬川のすぐそばの榎の巨木と「此付近 源融 河原院跡」の石碑を残すのみとなりましたが、近くにある塩竈町の地名が、わずかにその跡を偲ばせます。

碁盤の目のように京都市内を縦横に走る通りのひとつに、十条通りから葵橋西詰に延びる河原町通りがあります。河原町通りは、八坂神社や祇園などに通じる四条通りとも交わるとともに、デパートや飲食店などが並ぶ京都の繁華街を代表する賑やかな通りです。この河原町の名称は能「融」の舞台である「河原院」に由来するそうです。

藤原道長が西方極楽浄土を願って再建した鳳凰堂で有名な宇治平等院も、かつては源融の別荘であったといえます。また、源融の別邸は他に右京区嵯峨野にある清涼寺境内の阿弥陀堂あたりもそうであったと聞きました。境内にある案内によれば、現在の清涼寺は元、源融の山荘「棲霞観」の跡に棲霞寺として建立し、さらに棲霞寺の一郭に釈迦堂として清涼寺が建立されたそうです。清涼寺境内には嵯峨天皇、壇林皇后の宝塔の隣に源融の墓もありました。

今まで謡躰紀行をしても、訪れる人もないような寂しい場所もありましたが、今回は観光地として多くの人が訪れる名勝ばかりになりました。河原院を模して造られたという涉成園の美しい庭園を見ていると、もしもこんな贅沢な別荘が京都のあちこちにあったなら、融ならずとも、風雅な世界に浸っていたい気分になります。東山の山端から上る煌々とした月が広大な池の水面に映る様は、さぞかし幻想的な景色だったろうと思えました。

平成二十一年 長月吉日

廣田幸稔



京都タワーより河原町通りを望む
手前の木立は涉成園、その向こうに見える
並木は川端通。河原町通と平行して京都市
内を南北に走る。北方には比叡山に続く東
山が見える。

五条木屋町下川、高瀬川沿いにある「河原院跡」の石碑



涉成園 入口

源融が造園した河原院を忍ばせる
涉成園の池泉回遊式庭園。湖上には
浮島があり、サギが翼を休めていた。



清涼寺（右京区嵯峨）、阿弥陀堂（融の別邸跡）は本堂右奥にある。
清涼寺本堂（釈迦堂）境内にある源融の墓

